

僕の名前は 倉岡 シン!

今年でもう■校二年生になるが
未だに彼女どころか女友達すらいない

色々努力をしてはいるが空回りばかりで上手くいかない
どうやら女子にも下心を見抜かれてるようで

「必死すぎる童貞って感じてあれはない」

などと陰で言われる始末

童貞が必死になって何が悪いんだ!

そんな僕にも良い事も起きた

放課後に机に突っ伏していると

クラス的女子、しかも結構可愛い二人が地べたに座り

こちらにパンツが丸見えの状態でおしゃべりを始めたのだ

当然、僕は覆たふりをしながら観察をすることにしたんだ

「はあ、女子のパンツってどうしてこう素晴らしいんだ……」

見ているだけで幸せになるもんなあ、

きつとモテない僕への神様の贈り物だなきつと!)

しかし

そんなささやかな幸せな時間もあっさりと幕を閉じる

「ねえ美沙？倉岡寝たふりしてない？」

「うん、ていうか穴レバレたよね、
息ちよー荒いし！」

う、嘘、ばれてた……？
どうしよういや、寝たふりを通すんだ……
僕は本当に寝てるんだ……

「す……す……す……」

これなら文句あるまじ

「あはは……今度はちよー息殺して……ん」

ああ……

何をしてる裏目……

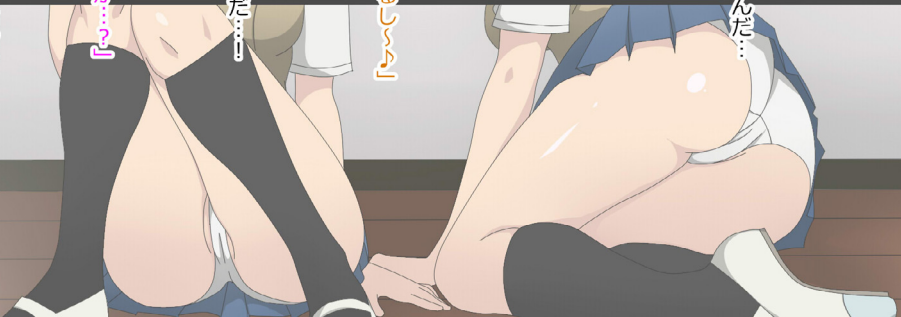
どうして僕はこう頭が足りないんだ……

「……ねえ倉岡、

千田でセックスさせてあげようか……？」

馬鹿にするなよ、

いくらなんでもそんな分かりやすい餌に……



「マジですか!!」

「嘘だよ」

「あはは、でもマヌケは見つかったようだね」

「しまったああ……!」

「つかどんだけ飢えてんの?
こんなのただの布きれだよ」

「倉岡そんなにあたしどやりたいの?」

「うっう、まあそりゃあ……」

やめる意味もなく期待させるな……!
これ以上の僕を弄ばないで……!



「ごめん、あたし・・・」

童貞とか生理的に受け付けないから」

「うあ、ああ・・・」

「まただ、童貞、童貞、童貞、童貞・・・
なんでそんなに否定されなきゃいけないんだ・・・
というか最初は誰だって童貞だろうが・・・」

「それにあたし処女だし初めては大事にしないと」

（え？八代って処女なの！、やったあ）

「いや、何喜んでんの？」

「舞子が処女でもあんたと何にも関係ないでしょ」

「な、何言ってる、別にそんなこと考えてないぞ
もう帰る・・・！」



「ちくしょお…馬鹿にしやがってえ…」

僕は逃げるように帰宅し

日が落ち暗くなるまで自室で憤っていた

なんで童貞はこうも馬鹿にされる！

なんで処女は神聖な物として祭り上げられる

いや、本当は分かっている…、大事にされるのは可愛い子の処女だからで
俺は馬鹿にされるのはイケメンじゃないから…

分かっているさ！

でも理屈じゃないんだ…割り切れるもんじゃない

自分で言うのもなんだが

僕の容姿は客観的に見て中の下と言ったところだろう
平均より下かもしれないが僕はたまにこう考えるんだ

もし僕が女だったら

中の中の女子にセックスしようと言われたら皆ならどうする？

「男と女の性の価値観を逆にしてくれ——!!」

「ああ、それならギじいけるっすww」

何か耳障りな声とともに
キーンという音が頭の中で反響し意識が薄れていく

やがて部屋全体がまばゆい光に包まれていく——

性的価値観逆転シミュレーション

処女(童貞)が捨てたくて

女子が必死な世界

ガタン、ガタン

気が付けば僕は学校へと向かう電車に揺られていた

（あれ？、僕何時の間に電車に？記憶が無い…）

よほど昨日の事が堪えたようだここに至るまでの記憶が全く無い

（あの二人、周りに言うてなければいいけどな）

昨日のやり取りを思い出すと体が熱くなっている
熱を逃がそうとシャツのボタンをはずしていく



「ああ…」

「…?」

不意に視線を感じ顔を上げると
そこには清純そうな子が僕の胸元ら辺を見つめていた

（この子たまに見かけるよなあ…少し地味だけどそれがまた可愛いというか
でもこんなに胸が大きかったか？）

（おお、セーラ服がばっつんばっつんじゃないか、大きい…！
朝から良い物見れたなあ…、それに良い香りもするし女の子最高！）

僕は少しでもいい香りが嗅ぎたくて前かがみになる



「おおお…♡」

(ああ、女の子の香りってどうしてこんなに甘いんだろう…
ん？、この子僕の胸元を覗きこんでないか…?)

少女はだらしない表情を作り僕の胸元の奥を見ようと背伸びをしている

「え、えへへ…♡」

(。。。)

最初は何かの勘違いだと思ったが間違いない
しかし何の意味が？

(試しにボタンを直してみるか)



「あゝ」

シユン…と擬音が聞こえるほど露骨にテンションが下がる少女

(ええええええええええー!!!)

明らかにボタンに手をかけた瞬間に眉毛がハの字を作るのを僕は見た

(つまりこの子は僕の身体に興味が!?、こんな事があり得るのか!?)

いや、冷静になれ!

昨日あんな醜態をさらした僕だ、またこの舞を踏むわけにはいかん!

(何か他の理由があるかもしれない!)

例えば乳首に毛が生えてて気になってたとか!

とにかくまだアクシジョンを起こしてはいけない!

そして学校に着くや否やトイレに駆け込み
乳首に毛が生えてないことを確認し

仲の良いクラスメイト達に先ほどの事を話してみた

すると…

「朝からそんなことがねえ…」

「いや、未だに信じられないよ」

あ、言っておくけど嘘じゃないからな」

「でもさ、そりゃお前も悪らよ…」

「うんうん…、…えっ」

なにが…？

「だから、ボタン外してたお前も悪いって言うてるの」

「そうそう、女子なんてエロイ事しか考えてないんだからさあ
そりゃ目の前で晒してりゃあ見るに決まってるだろ…」

（はあ…？何言ってるんだこいつら…！）

ジョークにしては笑えないしもし女子に聞かれたら…はっ！
浮かれていて二人の問題を忘れていた

（今思い出した！あの二人は？
どうしよう先に謝った方が良いかな…！）

「ふふ、馬鹿だよね、まあ面白かったけど」

「ねっ！しゃばらくあのネタで盛り上げれるわっ」

彼女たちは昨日の様に地べたで談笑していた

（二人ともまさか昨日の話してるんじゃない…）

おどおどしながら僕は近づく

「あ、あのう」

声が震えて上手く話せない

「お、倉岡？、どしたどした？」

（あれ？思ったよりフレンドリー
気にしてるのはこっちだけだったのか…？）

「あの昨日の事なんだけど…」

「昨日？…何かあったっけ…」

（忘れてる！藪蛇を突いてしまったか！？
ご、誤魔化せ…、何かほかの話題を…）

ふと視線が下に向かう

「ふ、二人ともパンツ見えてるよ…！？」

「え？」

「え？」

まずい！思ったことを口に出してしまった…！
僕の馬鹿…！



「うん見えてるね…やだ？
もしかして汚れてる？」

「えっ…！そ、そんなことないよ
凄く綺麗だよ！」

「え、そ、そう…？
パンツなんだから綺麗ではないと思うけど…」

(なんだこの違和感は…
とりあえず怒られるまで目隠し焼き付けておこう)

「…、ねえ倉岡…？
アタシのも見てよ…」

「ええ…!？」

ど、どういう状況だ…！
クラスの皆がいるのにそんな風に見せつけて！

「おっ、そればっかにしてけや…倉岡困ったんだわー」

「私達ただ倉岡と話してただけだよ？」

「そうそう！パンツの話題は倉岡から振ってきたんだもん〜」

「こいつは少しは隠せて言いたかったただだよ…なあ？」

「え、あ、いや…」

（どうしちゃったんだ山田あ？

お前ついに二次元好きを拗らせて

リアル女子がうつけつけれなくなっちゃったのか？）

「はあ…？真面目かってーの…」

「ねえねえ、倉岡今日どんなパンツ履いてんの〜？」

「おい、だから…」

「えっと…、黒のボクサーパンツだけど？」

僕はあまりの事態に反射的にズボンを覗き
確認し答えてしまった

「「「おお〜っ!!」」」
「「「ふう〜っ!!」」」

明らかに二人以上の歓声がクラスに響き渡る

「え、何? なんなの?」

「お前なく今晩絶対クラスの女子におかずにされるからな?」

「お、おかずっ!?!」

「あはは…、この様子じゃおかずの意味も分かってないね!」

「分かるわ! 毎日お世話になってるわ!
しかし何となく違和感の正体が分かってきたぞ
ただもう少し確証が欲しい!」

「あはは、まさか本当に答えてくれるとは
ご馳走様です!」

「やれやれ、よりによって今日は水泳があるってアホな!」

「どんまい、倉岡〜ひび♥」

「?」



「ふふふ！」

プールの真ん中で僕は不敵に笑う

例え変な目で見られようと笑わずにいられない

僕は遂に確信を得たのだ！

この世界は恐らくパラレルワールドなのだろう

そう思った理由は

まずプールの授業が男女共同で行われている事、

そして何より水着が全く違う

女子は大胆に胸元をはだけさせているのに対して

男子は自分のを含めウエットスーツの様に上半身を隠している

(何より女子のあのねちっこい視線！)

最初はクラスで僕にドッキリを仕掛けていたと思ったが
いくらなんでもここまで来れば信じてもいいだろう

そう！、この世界は男女の性的価値観が逆転しているんだ！

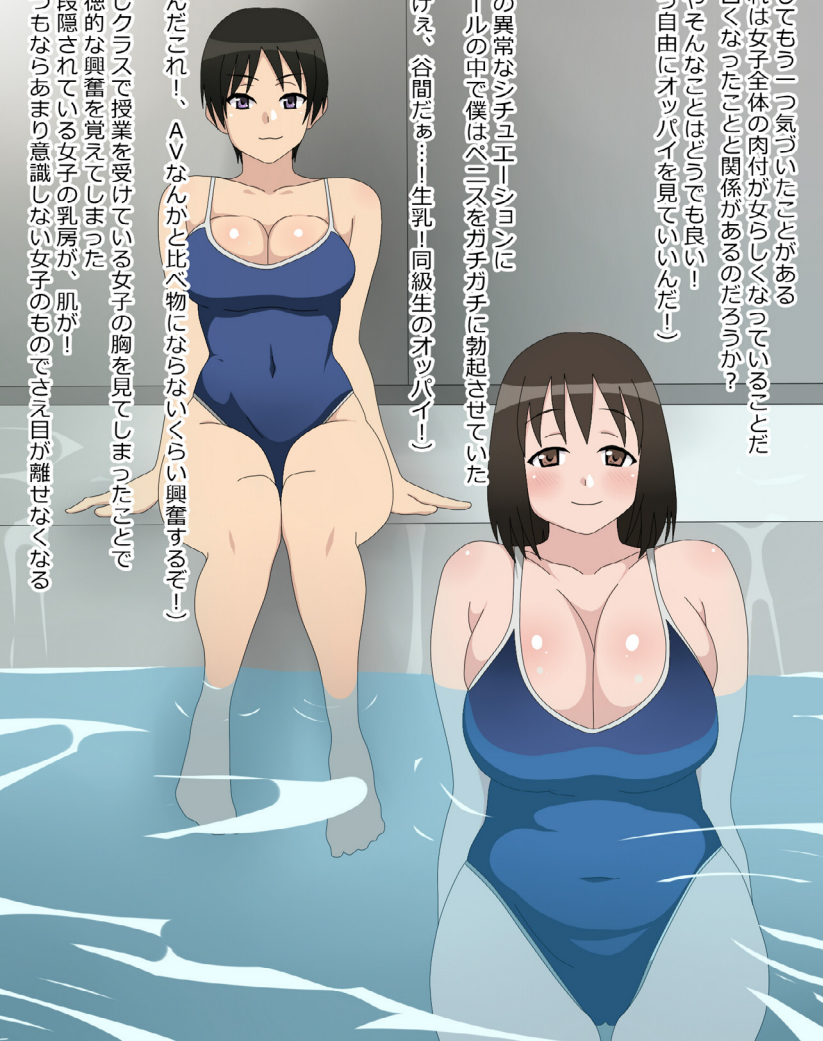


そしてもう一つ気づいたことがある
それは女子全体の肉付が女らしくなっていることだ
エロくなったことと関係があるのだろうか？
（いやそんなことはどうでも良い！
もう自由にオッパイを見ていいんだ！）

この異常なシチュエーションに
プールの中で僕はペニスをかちかちに勃起させていた

（すげえ、谷間だあ……！生乳！同級生のオッパイ！）

（なんだこれ！、AVなんかと比べ物にならないくらい興奮するぞ！）
同じクラスで授業を受けている女子の胸を見てしまったことで
背徳的な興奮を覚えてしまった
普段隠されている女子の乳房が、肌が！
いつもならあまり意識しない女子のものでさえ目が離せなくなる



「はぁ〜♡シンゴ君、水着姿色っばいよぉ〜♡」

「やっぱスク水は良いよね〜、体系がぴっちり分かるしさ〜いひっ♡」

「五十鈴ちゃん、シンゴ君今日は黒のボクサーだつてえ〜♡」

「あはは、聞いた聞いた、倉岡つて結構天然たよね〜」

「そこがまた良いの…♡シンゴ君絶対童貞だし!」

「なあ、やっぱお前女子にやらしい目で見られてるつて…!」

「あはは、まいったなあ…!」

「ああ、たままない!もつと見て〜!」

「おい、女子〜、男子ばっか見てないでちゃんと泳げよな!」



「はぁい」

「うるさいなあ、男子は、
少しくらい見ても良いじゃん減るもんじゃなし」

素直に聞く広瀬さんと

不満そうに足でバシヤバシヤと波を起こす水樹

（おお、広瀬さんぼっちゃり体系を抜きにしても

乳でかあ…）

プールの中を進むごとに

小さなスクール水着に締め付けられた豊満なバストが大きく浮き沈みする



一方水樹は、足を交互に出すたびに

未だに顔と一致しない推定Hカップの胸がブルンブルンと揺れる

（おお、おお…、おおおおお、凄い揺れ！…、水樹って、結構可愛いくね？）

彼女は 水樹 五十鈴

良く授業中でも笑いを取ったりして楽しませてくれる
クラスのムードメーカー

男女など関係なく気さくに話してくれるので僕にはありがたい存在、

(ただその反面、異性としては見れなかったんだけど
このオッパイである...)

(うーん、でもあの水樹だぞ、色気が無くてお笑い路線の...、でも良い乳してるし)

今までのイメージもあって素直にエロい目で見れない、近親憎悪に近い何かがある

(でもよく見ると結構顔は整ってるんだよなあ...、うーん、
顔隠せば文句なしで抜けるんだけどなあ...)



「何よ？倉岡もそんなじろ見てさあ〜」

「えっ、あいや…その」

流石に見すぎたか…！

いや怖気ずくな僕、この世界では女の肌なんて安いんだ
むしろ見てやったぐらいの気持ちで！

「水樹って結構スタイル良いね…」

「はあ？〜？皮肉かよそれ」

あれ褒めたつもりだったんだけど
何か変なこと言ったかな？

「どうせあたしは巨乳だよくだ…はあ」

(もしかしてこっちじゃ巨乳は好かれてないのか…！
どういう理屈だ？、巨根的な感じか？)



「はあ、はあ。」

（じやあ、この胸はこつちでは全然価値が無いのか…
それなら触っても怒らないかな…!?）

無意識に水樹の胸に近づいていく…

呼吸するごとに胸が上下しわずかに揺れる

水樹の健康的な色気に童貞の僕は完全に飲まれてしまった

（よし、決めた！僕は水樹の胸を揉むぞ！

水樹ならそんなに怒らないだろう、逆の立場なら嬉しいはずだ！、
そうに違いない！）

僕の理性などどっくに吹っ飛んでる

もうペニス在水中だろうとギンギンに滾っているんだ

「水樹い……!」

「ひゃあ……!!」

ようやく泳ぎ始めた水樹に僕は周りに人がいないかタイミングを見計らい
後ろから抱き着いた!

水中だから感じる生々しい体温、例えようのない柔らかかさ、
そして濡れたうなじから発する芳しい香り、
どれもこれもが痺れるほど僕を幸福で満たしてくれた

(やったー!僕はオッパイを触ったぞ〜〜!
水樹のだけど〜〜〜!)

例え水樹のだろうとオッパイはオッパイだった

「はあ、はあ、スンスン、はあはあ……！」
（ああー!! 良い匂い!! どこもかしこも柔らかい!!
すげえ!! 女の子の身体すげえ!!）

僕は完全に水樹の身体に夢中になっていた
異性としてみていなかった僕はもう何処にもいない
（ああ〜♡可愛いよ水樹♡オッパイふよふよで気持ち良いし
お尻も弾力が凄くて息子を押し返してくる〜!
シヨ〜トカツトも結構いいかもな〜♡）

「おい…なんだよ美沙か？それとも晶あ？
女に触られても…え？」

「はあはあ…♡」

「倉岡あ…!?」



「なっ、何してんだよぉ…♡」

驚いてはいるが拒絶はしてこないようだ
(これはいける…！僕の人生勝ち組決定だあ！！)

「ごめんね水樹、足つつちゃったみたいなんだ…
周りに水樹じか居なかつたから掴まっちゃったよ」

「そ、そんなんだあ…じゃあ、しかたないな…♡
良いよぉ…、しばらくつかまってるなよ…」

(よっしや—ラッキ—)!!

（お尻に絶対ちんこ当たってるよね！
生きててよかった——！！

足つってよっぽど痛いのかな？
アタシの胸と股間キュッと掴んじやってる——もしかして気づいてないんじゃない？
倉岡には悪いけどもう少し足つって——
人生に一度あるかないかのチャンスなんですっ！神様——お願いしますっ！

（ああ……♡どっして男子の身体って
こんなゴツゴツしてて気持ちいいんだろ♡？
良い匂いしてクラクラするし……♡
やばあ……倉岡、結構いいかも……♡
もっとお尻にちんこ擦り付けてくんないかなあ……♡）

「はあはあ…♡、大丈夫倉岡？
もっとしっかり掴まっつていいんだよ♡」

「はあはあ…水樹って優しいね♡
ごめんね、変なところ触っちゃって…♡」

もう僕の両腕は好きな所をまさぐっていた
片腕で乳を揉みしだき人差し指で乳首を転がし
もう片腕は本来大事な人しか触れてはいけない所に手を伸ばし
あそこの縦すじに指を沈めマウスのホイールを回す様に擦りあげていく

「はあ…♡、あう♡、ふうふう…♡」

「はあはあ…、ごめんねごめんね、水樹！♡」

「良いんだよ…♡はあはあ、仕方ないじゃん…足つつてるんだもん…♡」